

アトピック・サイト

ロラン・バルト著、桑田光平訳
『ロラン・バルト 中国旅行ノート』

筑摩書房 二〇一一年三月

たとえばパリの公共交通機関利用者が日常的に耳にすることとなる語のひとつに *incident technique* という語がある。技術的なトラブルとでもいうべきこの語は、その出現によって前後を分つような途方もない出来事というよりも、むしろ日常的に起こりうるとともに、短時間で修復可能な出来事の響きをそなえている。とはいえ、習慣的に利用する列車のささやかな遅延が、単にこの利用者に心理的な起伏をもたらすばかりでなく、ときに予期せぬ事態との遭遇をもたらすこともあるかもしれないし、実際、ピーター・ハウイットの「スライディング・ドア」(一九九八年)と題された映画は地下鉄に乗りえた場合と乗りえなかった場合との差異が、その後の人生の展開にどのように波及しうるかという主題のもとに構成されている。

あるいは、この偶発的な出来事によって、この利用者は日常的に利用する交通機関が通常は支障なく運行しているという事実を初めて発見するかもしれない。そして、『超II日常』と題された著作(一九八九年)の冒頭に置かれた「何にアプロロチするのか」(初出は一九七三年)で、ジョルジュ・ペレックが新聞は「何もかもを語る、日常をのぞいては」と指摘するように、日常は我々の言説からつねに脱落する。だからこそ、日常

を、あまりに当然のごとく反復され、習慣化されているがゆえに意識されることもない超II日常を問い直し、記述すること。ペレック自身による数多くのこの試みがいくつもの美しいテクストを産出したこと周知のことだし、『家出の道筋』(酒詰治男訳、水声社、二〇一一年)で、その一部を日本語で読むこともできる。

ところで、この偶発事(incident)という語の語源的な意味に遡行し、そこに記述行為のひとつの可能性を見出した作家がロラン・バルトに他ならない。バルトは、この語をごく端的に「それは、日々が織りなす織物につけられた、微かですぐに消え去ってしまうあの折り目であり、ほとんど書き留めることのできないもの、記述のゼロ度とでもいえるもの、何かを書くために必要とされるだけのものである」と定義している。生という織物に降りかかる一枚の葉のようなささやかな偶発的出来事を記述すること、しかも、それがやがて書かれることになるかもしれないものへの引金となる潜在性をそなえながらも、その何かが事前に構想される手前で、より正確に言えばその構想不可能性という条件のもとに記述すること、ここにバルトの記述活動を駆動させる倫理があるといえるかもしれない。そして、この偶発事への記述的対応がいわゆる断章という形式に他ならない。

バルトのこの偶発事への視線に注目した美しい書物、『ロラン・バルト、偶発事へのまなざし』(水声社、二〇一一年)の著者、桑田光平氏によって翻訳された『中国旅行ノート』(ちくま学芸文庫、二〇一一年)は、一九七四年四月十一日から五月四日までのおよそ三週間にわたる中国旅行のさなかに日々書き

留められた記述からなっている。それでは、ここでバルトは何を記述したのだろうか。あるいは、どのような偶発事にバルトは遭遇したのだろうか、あるいは遭遇することに失敗したのだろうか。というのも、「驚き、偶発事、俳句の可能性を妨害し、禁止し、検閲し、無効にする旅行社の役員」の存在によってこの旅行が終始一貫して粹取られていたからだ。だが、この問いの手前で、この中国旅行を取り巻く文脈に若干触れておくことにしよう。

一九七一年に刊行されたマリア・アントニエッタ・マツチオッキの著書、『中国について』に対するフランス共産党からの非難への反撃として、二回にわたる中国特集号を刊行した『テル・ケル』誌のグループに中国旅行への公式の招聘要請が届いたことに今回の中国旅行は端を発している。フィリップ・ソレルスを中心とするこの季刊雑誌が毛沢東主義の中国への関心を増大させていき、また、ある種の幻滅に至る過程に関しては、二十二年間にわたり刊行されたこの雑誌の詳細な歴史を再構成した、阿部静子氏の『「テル・ケル」は何をしたか』（慶応義塾大学出版会、二〇一一年）に譲ることにして、ソレルス、ジュリア・クリステヴァ、マルスラン・プレネといった『テル・ケル』誌の主要参加者、および、その版元に勤務する哲学者のフランソワ・ヴァールとともに、バルトはこの中国旅行に参加したことを指摘しておくことにとどめておこう。そして、文化大革命下の中国において、受け入れ窓口の旅行社が体现する言語体制と同等の言語体制をバルトがソレルスに見出し、この体制に疲弊する徴候が、この膨大な記述のいたるところに痕跡として刻印されている。

ともあれ、毎日、克明に中国での見聞を記述しつつ——実際、ノートは三冊に及ぶことになる——、他方で、これらの記述の端緒からこのノートは自らの「エクリチュールの挫折」の証明以外にしかなりえないであろうことをバルトは予測しているし、また滞在一週間後の時点で「エクリチュールの開花」が到来しないことを確認している。その理由は、ごく端的に「偶発事、折り目、突飛なもの」が稀薄であるからに他ならない。この偶発事の欠如——それは反復されるステレオタイプのプロックの増殖に包囲されているからなのだが——はバルトの書く身体に、たえざる偏頭痛、疲労、不眠といった変調をもたらすことになる。それでは、挫折を宿命付けられたかのように開始されたこれらの記述に、たてば、『偶発事』（二九八二年）に収録されたモロッコ旅行の際に記述された断章に対応するような記述を見出すことはできないのだろうか。むしろ、本訳書に収録された小林康夫氏の「そのとき、（彼自身による）バルトは？」が指摘するように、バルト自身こそが、このステレオタイプが支配する空間において「偶発事、折り目、俳句」として存在しているといえるだろうし、バルト自身の身体に日々生じた変調こそが、中国旅行が可能にした偶発事であったとさえいえるだろう。事実、このノートが、取材対象の行使する言語のプロックを忠実に記述しながらも、同分量とはいわないまでも少なからぬ部分が天気、食事、健康状態、など自らの身体を直接的に取り巻き、それらに作用力を行使する対象の記述に割かれている。

そして、この中国という対象に対して、内部からの視線の獲得によってでもなく、また西欧からの視点によってでもなく、

「やぶにらみの視線」を行使しようとするバルトにとって、欲望の充足を求めるかのように執拗に現地でのスーツ購入を試みるのも、また、きわめて快適な採寸を受けたことも、旅行期間中にこのスーツを自ら受け取ることができなかったにせよ、「この旅行の最終目標」であるときえ書かれたこのスーツこそが、この「やぶにらみの視線」を体現するものであったからだ。「今回の旅行が政治的なものだ」という意識など取るに足らないものにするため」のスーツ、それは自らの身体という場に作用する、中国のものでも、西欧のものでもないア・トピックな襞
|| 折り目に他ならない。

(松浦寿夫)